

東京バッハ合唱団 月報

[第 652 号] 2016 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 652

October 2016

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 114 回定期演奏会へのお誘い、曲目ご案内

危機と平安——バッハの人生表現の深み

大村 健二 (団員: テノール)

昨夏の第 112 回定期演奏会 (2015 年 8 月 22 日、南相馬市民文化会館) では“災害に耐えて希望と信頼に生きる”を主題にかかげ、2 曲のカンタータ《わが心 思い 神にゆだねたり》BWV 92、《主イエス眠り いかにかすべきわが望み》BWV 81 と、モテット 1 曲《イエス よろこび》BWV 227 を上演してきました。

ひきつづいて第 113 回定期 (2016 年 5 月 28 日、府中の森芸術劇場) では“日常生活のバッハ—教会暦をたどって”をテーマに、降誕節カンタータ《地に来ませり 神のみ子》BWV 40 から、安息日の意味を思うカンタータ《み名の栄光を讃えよ》BWV 148 まで、変わらぬ一年のめぐりに感謝を捧げました。災害と日常、ここ数年、日本中が考えつづけたテーマでした。

今回、第 114 回定期の曲目は、これまでの内容のまとめを意図して選ばれました。右枠内ご案内のとおりです。これらを束ねる主題は、“危機と平安—バッハの人生表現の深み”ということになりましょう。取りあげた 3 曲の教会カンタータは、いずれも、カンタータ作家としてのバッハの、まさに円熟期の作品です。BWV 82 (1727 年・41 歳)、BWV 140 (1731 年・46 歳)、BWV 14 (1735 年・49 歳)。40 歳代のバッハの作風の広がりや完成度とに目を見張ることになるはずです。

が、まさにその時期たるや、バッハ家では毎年のように幼い子を失っていた (上記のうち 1727 年から 33 年までの 7 年間だけでも、0 歳から 5 歳の 5 人の子どもを葬った) のであり、さらに打ちつづく職業上の衝突に、バッハは心を痛めていたのです。では、その逆境のなかで、いったい、これら卓越した作品を産みだし得た、創作力の源泉は何だったのか。

わたしたちは、同じステージでお届けする《アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳》のなかに、その秘密を見出すこととなります。1725 年に夫ヨーハン・ゼバスティアンの手によって書き込みが開始された、妻のための「音楽帳」には、多くのクラヴィーア音楽の楽譜にまじって、慰めと安らぎに満ちた 10 曲 (*) の声楽曲が、バッハ夫妻や息子たちによって記入されています (最後の書き込みは 1740 年ごろ)。その声楽曲の全

曲 (*後述、p.3 左段・下から 9 行目以下) を、まとめて日本語でお届けするのは、本邦初の試みです。

以下に、当日の演目をご案内しましょう。

なお、上演歌詞は Web 上でご参照いただけます (ご請求いただければ、刷り出してご郵送いたします)。

ホームページ <http://bachchor-tokyo.jp/> → 「出版局」 → 「歌詞 [上演用] 公開」

■カンタータ第 14 番《かたえに 主いまさずば》

Wär Gott nicht mit uns diese Zeit BWV 14

カンタータ 3 曲のうち、年代的には最後に置かれます。旺盛な教会カンタータ量産期 (いわゆるライプツィヒ第 1 期、1723 - 29 年) をすでに過ぎ、教会音楽の創作から遠ざかった第 2 期 (1730-35 年) の終りに書かれ、初演されました (1735 年 1 月 30 日)。バッハが新作楽曲のみで書き下ろした最後のカンタータ作品だ

第 114 回定期演奏会 ご案内

| 日時 | 12 月 3 日 (土)、午後 2 時開演

| 会場 | 府中の森芸術劇場ウィーンホール

| 曲目 |

●カンタータ第 14 番《かたえに 主いまさずば》BWV 14

●『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』より、10 曲の音楽作品 BWV 299, 508-518

●カンタータ第 82 番《われ 足れり》BWV 82

●カンタータ第 140 番《目覚めよと呼ばわる 物見の声高し》BWV 140

| 演奏 |

Sop 光野孝子、Ten 鏡 貴之、Bar 山本悠尋

Orch 東京カンタータ室内管弦楽団、Org 草間美也子

Cond 大村恵美子

| チケット | 発売中

前売り 3500 円 (当日売り 4000 円)。

事務局までお申し込みください。郵便振替用紙を同封のうえ、お送りします。

後援会・団友のみなさま

ご招待状を、同封いたしました。

遠方の方もあろうかと存じますが、土曜のマティネですので、余裕をもってお出かけいただければ幸いです。ご来場をお待ちいたします。

ったようです。これも以前に触れたとおり、冒頭の合唱曲の技巧の高みは、数年後に迫った《フーガの技法》の世界を彷彿とさせるもので、お聴きくださるみなさまも、「反行フーガ」の織物の、そのスリリングな複雑さに圧倒されることでしょう。

ただし、バッハの初演の場に居合わせた会衆（ライプツィヒ市民）にとっては、「反行フーガ」といった難しい話は無用でした。各声部でなんども繰り返されながら歌い継がれる主題は、おなじみのルターのコラール《かたえに 主 いませずば》（コラール・ハンドブック No. 131）の旋律なので、つぎつぎと彩りを変える展開を余裕をもって楽しんだことでしょう。可能ならば、われわれもこのコラール旋律に馴染んでから聞き始めたいものです（南相馬でそうしたように）。

ルターの心にこのコラールを着想させた発火点は詩編 124 篇でした。

「イスラエルよ、言え。

『主がわたしたちの味方でなかったなら

主がわたしたちの味方でなかったなら

わたしたちに逆らう者が立ったとき

そのとき、わたしたちは生きながら

敵意の炎に呑み込まれていたであろう。

そのとき、大水がわたしたちを押し流し

激流がわたしたちを越えて行ったであろう。

そのとき、わたしたちを越えて行ったであろう

驕り高ぶる大水が。

主をたたえよ。

主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。

仕掛けられた網から逃れる鳥のように

わたしたちの魂は逃れ出た。

網は破られ、わたしたちは逃れ出た。

わたしたちの助けは

天地を造られた主の御名にある。』

これは、このカンタータ全体の大意でもあります。お分りのとおり、南相馬で歌った 2 曲のカンタータと同じテーマ（イエスが嵐を静める；マタイ 8；23-27）です（BWV 92 は内容的に同テーマ、用途指定は別）。

[編成：独唱 STB、合唱、ホルン、オーボエ 2、弦合奏、通奏低音]

■『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳 1725』より、10 曲の音楽作品 BWV 299, 508-518

最初の妻マリーア・バルバラに先立たれたバッハは、翌年、ケーテン宮廷のソプラノ歌手アンナ・マクダレーナと再婚しました（1721 年）。当時 20 歳だった花嫁は、いきなり前妻の残した 4 人の子ども（長女 13 歳と、6 歳から 10 歳の 3 人の兄弟）の母親になったのです。1725 年の「音楽帳」が書き始められたのはその 4 年後、当公演のチラシの挿画（E. T. ローゼンタール、1870 年）の想像もその前後の光景でしょうか。

以下のメモは、新バッハ全集の当「音楽帳」の巻の編集校訂者 G. v. ダーデルセンの、実用愛蔵版のための覚書き（要約・大村恵美子、声楽曲部分のみをまとめた楽譜集の刊行を計画）によります。

①コラール《みち足りて しずまれ》

Gib dich zufrieden und sei stille BWV 511

パウル・ゲールハルトの讃美歌、旋律とバス声部はバッハ。[当公演での 4 声体合唱の実演は、実用愛蔵版に施された鍵盤用和声付けを参照しつつ、内声部を補充した編曲（大村恵美子）による]

②アリア《気晴らしに タバコ詰め》(パイプの歌)

So oft ich meine Tobacks-pfeife BWV 515a

当時流行の歌詞（全 6 節）の第 1 節に、バッハ家の子どもの誰かが音楽付けしたもの。母（アンナ・マクダレーナ）が浄書し、父がバス声部を加筆。この天才少年は、後に精神に異常をきたし、早逝したゴットフリート・ハインリッヒ（作曲当時 12 歳）らしい。[バス独唱と、①同様の編曲による 4 声体合唱、種々に編成]

③アリア《かたえに 主 いませば》

Bist du bei mir, geh ich mit Freuden BWV 508

ある資料によると、曲は 18 世紀の作曲家 G. H. シュテルツェルで、世俗的恋唄のグループに分類されていたか？ [原詞の主語“du”に限定はない。大村訳では“主”]。[ソプラノ独唱]

④アリア《わが心 なにゆえ嘆き》

Warum betrübst du dich BWV 516

歌詞の出典不明。作曲はバッハの可能性。[4 声体合唱、①同様の編曲による]

⑤コラール《主よ 内なるみ心を われにも》

Schaffs mit mir, Gott BWV 514

歌詞は、シレジアの詩人（シュモルク、1672-1737）による。旋律と低音、数字による和声付けは、おそらくバッハ。[4 声体合唱、①同様の編曲による]

⑥アリア《お気持ちは そつと教えて》(ジョヴァニーニのアリア)

Aria di Giovannini „Willst du dein Herz“ BWV 518

音楽帳に記載された「ジョヴァニーニ」という人物は特定されていない。作曲者も不明。“秘密の恋”というロココ風の主題をあつかう詩は当時の流行だった。記帳の時期は 1733 年以前と、かなり早い。

[計画中の楽譜集の覚書きに訳者（大村）は、以下のコメントを添えている：「……この歌の雰囲気はユーモアでゆるめられているとしても、ゼバスティアンと最初の早逝の妻バルバラとの出会い——ごく若い孤児同士の、不安な従兄妹（いとこ）カップルを思い出させるので、後日第 2 の妻アンナ・マクダレーナによって、愛情をもち、亡妻追悼の意もこめて家族音楽帳の中に挿入されたのではないだろうか。】[テノール独唱、全 4 節]

⑦コラール《わが主 み神 われ歌わん》

Dir, dir, Jehova, will ich singen BWV 299

旋律、4 声体編曲ともバッハ自身による。B. クラッセルウス (1667-1724) の詩。《シエメルリ歌曲集》(『宗教歌曲集』) 中にも採録した。[訳者コメント (同上) : 「この歌こそ、当音楽帳の紛れもない主人公、アンナ・マクダレーナの存在に、戴冠的なハイライトを意味付けるものと言えないだろうか。】[全 8 節から 3 節を上演。1) ソプラノ独唱、3) ソプラノ独唱+4 声ハミング、8) 混声 4 部]

※ [標題が《わが主 エホバ …》から《わが主 み神 …》に改訂されたことについての経緯は、次号月報掲載予定の小海基氏の解説『消えた神の名称「エホバ」』を参照]

⑧ コラール《わが魂の友よ なが愛に憩うとき》

Wie wohl ist mir, o Freund der Seelen BWV 517

W. Ch. ドレスラー (1660-1722) の 詩。作曲者不明、低音はバッハ。[4 声体合唱、①同様の編曲による]

⑨ アリア《思いみよ 鐘の音とともに墓に入りて》

Gedenke doch, mein Geist, zurücke BWV 509

由来不明。低音声部の振り子のような動きは、鐘の音の表現。[テノール独唱]

⑩ コラール《いかづちの言葉 おお なんじ永遠よ》

O Ewigkeit, du Donnerwort BWV 513

音楽帳を締めくくる位置に置かれているが、記入は 1725 年のすぐ後の時期。前項の曲 (BWV 509) と同時か。詩はヨーハン・リスト (1607-1667) の第 1 節、旋律はヨーハン・ショープ (1665 歿)、ヨーハン・クリューガー (1568-1662) [コラール・ハンドブック No. 101]。アンナ・マクダレーナの手による、旋律と低音の記入は、夫の 4 声体版からだ。[が、内声の書き写しはなし。そこで、今回の上演では音楽帳に先行する同名のカンタータ BWV 20 の終結コラールを、そのまま採用した。4 声体合唱]

[訳者コメント (同上) : 「ここにはコラールの第 1 節が付けられているが、「音楽帳」全体の最終の言葉として、私は、第 1 節の末尾〈心うち震え ことばも出だせず〉よりもむしろ、第 16 節 (最終節) の末尾〈み心にあらば みもとに召したまえ〉のほうがふさわしかったのではないかと思ひ、後者も括弧に入れて原譜の歌詞の下に併記してみた。1724 年 6 月 11 日初演のコラール・カンタータ BWV 20 《いかづちの言葉 おお なんじ永遠 (とこしえ) よ》の第 11 曲最終コラールが、まさにその通りになっているからである。】

この「音楽帳」には、実はもう 1 曲の音楽が含まれます (すなわち、声楽曲は全 11 曲) が、それこそがバッハの残した“慰めと安らぎ”の表現の頂点を示すものと呼んで差支えない名曲です。レチタティーヴォ《われ 足れり》とアリア《まどろめ 弱れるまなこ》の有名なセットです。休憩を挟んで後半のステージでお届けするカンタータ第 82 番《われ 足れり》のなかに組み込まれていますので、そちらでお楽しみください。

[編成：独唱 STB、合唱、通奏低音・オルガン]

■カンタータ第 82 番 《われ 足れり》

Ich habe genug BWV 82

バッハ一家がライプツィヒ市に定着して 4 年目を迎えようとしている、1727 年の「マリアの潔めの祝日」(固定祝日、2 月 2 日。下記を参照) に初演されたバス独唱用のカンタータです。

イエスの誕生から 40 日の後、「モーセの律法に定められた彼らの潔めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った」、と新約聖書には書かれています (ルカ 2 ; 22-32)。ここにシメオンという老人がいて、主が遣わすメシア [救世主、キリストのこと] に会うまでは決して死なない、という聖霊のお告げを信じていました。彼が霊に導かれて境内にやってきたとき、ちょうど神殿に詣でるイエスも親に連れられてきました。「シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

『主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕 (しもべ) を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

これは万民のために整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。』

これが古来「シメオンの頌歌」と呼ばれる箇所、聖書のなかでも、とりわけ印象的な光景の一つと言え

第 115 回定期演奏会 予告

《口短調ミサ曲》日本語版、再演

2017 年 11 月 23 日 (祭) 午後、杉並公会堂

＝ 参加団員募集 ＝

東京バッハ合唱団は、来年、創立 55 周年を迎えます。2011 年 (第 106 回定期)、内外の合唱界に衝撃をあたえた「《口短調ミサ曲》日本語版」の再演をもって、これを記念することとなりました。

あわせて宗教改革 500 周年の年、バッハの老舗合唱団としては、敢えてルター詩によるカンタータを撰ばず、ミサ通常文をテキストとした、バッハ畢生のミサ曲をもって、作曲家自身が極めた“普遍”の魂を歌い上げようとしています。ぜひご参加ください。

○新規募集人数：各声部 10 名前後 (SI/SII/A/T/B)

○先行練習：本年 9 月より (第 114 回定期の曲目と並行して、音取り練習を始めています。いつでもご参加ください。12 月まで)

○新規練習開始：2017 年 1 月 7 日 (土) より。

〔土曜〕15:30 - 17:30 荻窪教会 (日本基督教団)

〔月曜〕18:30 - 20:30 目白聖公会、どちらへの参加も可。

○使用楽譜：新バッハ全集・新訂版 [BA5935-90]。日本語訳詞を、各自で書き込みます。

○問合せ/申込み：東京バッハ合唱団事務局。楽譜入手、訳詞のことなど、お気軽にお問合せください。

ましょう。当カンタータは、この老シメオンの心境を「われ」に置きかえて、独唱バスに歌わせたもの。第1曲アリアは、この頌歌の内容を忠実に歌い上げています。

曲中、第2曲のレチタティーヴォと第3曲のアリアとして登場するのが、先述の「音楽帳」掲載のセットでした。ただし、音楽帳掲載の稿は、アンナ・マクダレーナが歌うためのソプラノ声域でした。

2. レチタティーヴォ(バス)

われ足れり！ 慰めは 主イエスと一つにならん
ことなり。信仰もて 主を われ抱(いだ)きまつる、
シメオンとともに。われも行かしたまえ。わが
肉の縄目より解き放ち、ああ 別れ告げしめよ、
喜びもて：われ満ち足れり、と

3. アリア(バス)

まどろめ 弱れるまなこ

やすらに閉じよ。

われ留(とどま)らじ、もはやこの世に

わが魂には益なし。

ここは苦しみのみ、

かしこに見るは 甘き平和 安らぎ [ダカーボ]

(訳詞・大村恵美子)

このダカーボ・アリアの中間部末尾2小節は、「甘き平和 安らぎ」の歌詞が、アダージョの指定でしみじみと吟かれます。喜びと平安のうちに生を終えられる、という至福(われ足れり!)の実感の、みごとな表現と言えるでしょう。

このカンタータでは、弦合奏のほかに唯一の旋律楽器としてオーボエが活躍します(上述の第3曲をのぞく、第1曲と第3曲のアリア)。冒頭アリアでの旋律の歌い出しは、この木管楽器ならではの、柔らかく深みのある音色によって、老シメオンの心境をまっすぐに伝えてくるようです。

[編成：独唱B、オーボエ、弦合奏、通奏低音]

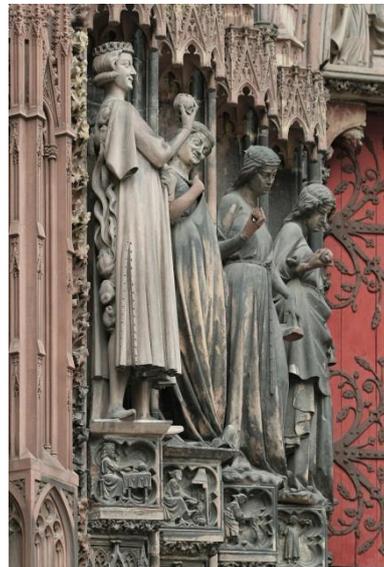
■カンタータ第140番《目覚めよと呼ばわる 物見の声 高し》

Wachet auf, ruft uns die Stimme BWV 140

当公演のカンタータは、3曲ともかなり特殊な出自をもっています。この曲の場合は、教会暦の都合によって稀なめぐりとなった日曜のために用意されました。

初演の日付け、1731年11月25日というのは、教会暦上の、この年の大晦日にあたる「三位一体節後第27日曜日」でした。翌週は待降節第1日曜日であり、キリスト教会のカレンダーは、ここを元旦として次の年度を開始します。しかし、「三位一体節後」は例年ですと25週から26週まで。27週あるケースは、イースターが3月27日以前に設定される年度にのみ巡ってくるので(4月中の設定が多数)、バッハの生涯では1704年、31年、42年の3回だったそうです。

■「愚かな乙女たち」像、部分(フランス・ストラズブル大聖堂)
顔の表情に注意。手にリンゴを持った「誘惑者」(左端)の背中に蛇や蛙がひそんでいる。柱の左の見えない二人を加え、五人の愚かな乙女の右手にはランプがない。右奥の扉の対象の位置に、賢い五人の乙女たちの像があり、彼女らはランプを高々と掲げている(「月報」第六四六号・二〇一六年四月、参照)



バッハは、ライプツィヒでのトーマス・カントル職への赴任と同時に、毎日曜日と祝日のためのカンタータ作曲を開始し、教会暦に沿った年間のカンタータ作品のストック(年巻)を準備します。1723年からの数年間(ライプツィヒ第1期)で4巻のセットを用意して、以降の日曜・祝日の礼拝では暦にあったカンタータを再演し、使いまわすという計画を実行していますが、セット制作の期間にはこの例外の主日は訪れなかったので、カンタータ新作がまばらになった1731年に初めて、この日のために作曲したのです。

この魅力的なカンタータ《目覚めよと呼ばわる…》が、バッハファンの人気のつねに上位を占める理由は、この創作時期の偶然にもよるのではないのでしょうか。ラッシュアワーのような連作の嵐を過ぎて、すでに200曲以上の実践を積んだバッハが、楽しむような、慈しむような余裕をもって臨んだ、ひさかたのカンタータ作品、そんな鮮新さを感じるからでしょう。

この稀に訪れる教会暦の礼拝で読み上げられる福音書は、神の国の到来への準備を説く、「花婿を迎える10人の乙女のたとえ」(上掲写真)(マタイ25;1-13)です。賢い乙女たちは、ランプの油の備えをおこたらなかったため、夜遅くなった花婿の到着を迎えることができたが、愚かな乙女たちは眠り込んでいて灯油を切らし、婚礼の宴から締め出されたのでした。「だから、目を覚ましていなさい」と書かれています。

基本コーラルは、フィリップ・ニコライ(1556-1608)の、カンタータと同名の有名な作品(コーラル・ハンドブックNo.130)。ここでは、第1曲(合唱・コーラル編曲、旋律はソプラノ)、第4曲(今回は合唱テノールの斉唱)、第7曲(終曲、4部合唱)と、全7楽曲中に3回も登場します。なお、ソプラノとバスの2つの二重唱(第3曲、第6曲)は、イエスの到来を焦がれ待つ「魂」と、そのイエスとの応答。雅歌の世界ともみまがう、この聖化された愛のかたちは、美しい。

[編成：独唱STB、合唱、ホルン、オーボエ2、オーボエ・ダ・カッチャ、弦合奏、通奏低音]